

先人の足跡―13 「武士道」 武士道精神を發揮した

乃木大将

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

第11回の「先人の足跡」で日本海軍士官の武士道について、お話ししました。今回は陸軍軍人が武士道精神を發揮し、その行いに国内外の人々が感動した話をしましょう。その人物とは日露戦争時の乃木大将です。

アメリカの「シカゴ・ニュース」の特派員であったスタンレー・ウォシユバンは、日露戦争時に従軍記者として乃木大将の第3軍と行動を共にし、大将を真近に見ていました。そして乃木大将の死を知り、『Zog』（邦訳『乃木大将と日本人』）という本を著し、その中で次のように述べています。

「私は直接乃木大将を見、かつ乃木大将を知るに及んで、その人格と天稟（注：生まれつきの才能）とに痛く感激させられたものである。將軍ほどの徹底的理想主義者は、かつて知り得なかつたのである。將軍の一大軍人たることは、全世界に知らぬ人はない。しかし、その私的、個人的方面、その純真掬すべき（注：気持ちを含み取る）ほどの恩情、婦女子の柔和にも類うべき、そのなつかしい慈容（注：情け深い姿）に至っては、英米人の知るところでなく、また全く理解し得ないことと思う。乃木大将の人格を知らんとするには、剛勇鉄の如き軍人としての大将と、温厚懇切なる友人としての大将と、この二つの方面から觀察する必要がある」

このように外国人から見ても乃木大将は軍人としての素晴らしい資質を持ち合わせているだけでなく、その仁愛（情け深い心で人を思いやること）の心に溢れた人柄は素晴らしいものでした。その乃木大将の仁愛の心に根ざす武士道精神が端的に表れた「水師營の会見」が今回のお話です。

2 佐佐木信綱作「水師營の会見」

このことを知る上で、良い歌があります。これを作詞した佐佐木信綱という方は、明治5年（1872年）生まれで東京帝国大学文学部古典講習科を卒業し、歌人・国文学者として大きな足跡を残し、昭和38年（1963年）に亡くなりました。昭和12年（1937年）に文化勲章が設けられた際、これら功績により第1回目の受賞をされた方です。この方が明治39年（1906年）に文部省尋常小学校読本のために『水師營の会見』を作りました。その後、この歌は明治43年（1910年）に「尋常小学読本唱歌」（唱歌とは学校教育用の音楽のことであり、現在の「音楽」

の歌詞となりました。水師營とは旅順要塞を攻撃した乃木大将と同要塞司令官のステッセル中将とが戦いを終結させるために会談した地名です。

まずは、その歌（本稿の後ろに掲載）をお爺ちゃん（又はお父さん）に歌って貰って下さい。音痴で歌えないと言われたなら、次のURLをパソコンでクリックして聞いてください。

URL: https://www.youtube.com/watch?v=qv_nHhb7Qg8

如何でしたか？ 文語体（昔の文章語）ですので、十分にわからなかったのではと思います。

そこで「水師營の会見」に至るまでの乃木大将率いる第3軍とステッセル中将率いる旅順要塞の戦いの概要を説明した後、この「水師營の会見」をお話ししましょう。

3 旅順攻略戦

明治37年（1904年）2月10日、日本はロシアに対し宣戦布告を行い、日本海軍は2月から5月にかけて、露国の旅順艦隊の早期撃滅を期し旅順港口に船を沈めて港外に逃げられないようにして艦砲射撃で撃破しようとした。しかし成果がうまく上がりませんでした。

初めには鴨緑江を超えて満洲に進出します。また同時期に第2軍は西端に旅順港のある遼東半島の東の付根付近に上陸し同方面の敵を撃破した後、第1軍に呼応して北進を始めます。このため旅順要塞の露軍に対しては当初封鎖監視しておくだけで良いと考えていました。しかし旅順艦隊の早期撃破が旨くないか海軍からの要請や陸軍としても北進する2個軍の後方に有力な露軍を残しておくのは危ないと判断し、5月に旅順要塞を攻略することを決定します。

そこで、当初2個師団からなる第3軍が編成されます。軍司令官には日清戦争で旅順攻略に参加した経験のある乃木希典中将が任命されます。

乃木中将には勝典と保典という息子が二人居ましたが、二人とも陸軍軍人となりこの戦いに出征していません。

乃木中将以下軍司令部が広島県宇品から戦場へ向かう直前の5月30日、第2軍に所属していた長男の勝典（25歳）が遼東半島のほぼ真ん中にある南山の戦場で27日に戦死したとの悲報が届きます。しかし乃木中将は日記にただ一言「他言せず」と書き残し、我が子の死んだ旅順へと向かいます。そして6月6日に遼東半島に上陸します。また乃木中将は同日付で大将に昇任します。

要塞攻略には時間がかかるものの被

害を少なくするため塹壕を掘りつつ攻撃する要領と犠牲覚悟で一気に攻める強襲攻撃の二つがあります。

陸軍は第3軍を旅順攻略後、速やかに満洲の主戦場において運用するよう考えていました。また海軍からの早期攻略要請もあり、時間をかけない強襲攻撃をとることにします。

それは旅順要塞の細部把握はできていないものの、敵兵力を約1万5千人、火炮約2百門と見積もっていましたので、総兵力約5万人と3倍以上の第3軍により一気呵成に攻略できると考えました。

しかし実はロシア軍は総兵力約4万7千人、火炮約5百門を備えていました。しかも約4年もかけ、旅順要塞の各堡壘を厚さ1〜2mのコンクリート壁で覆うベトン陣地とし、その前には幅6〜12m、深さ7〜9mの壕を掘り、さらにその外側には鉄条網や地雷を埋めていたのです。

このことを知らないまま6月26日から進軍を開始した第3軍は、以降3度の総攻撃を半年以上にわたり行い、戦死者1万5千4百人余、負傷者4万4千人余と日露戦争で最大の犠牲を出し、やっと旅順要塞を攻略します。いわば陸軍としては当初見向きもしなかった旅順要塞の攻略が日露戦争最大の激戦となったのです。それでは3度の総攻撃のあらましを見てみましょう。

う。

第1回総攻撃は8月19日から24日までの間に行われました。敵の堡壘は我が砲撃を跳ね返し無傷のままであり、3日目には砲弾の不足をきたします。そのような中で突撃を行ったものですから約1万6千人の死傷者を出し、攻撃中止に至ります。

そこで第3軍は攻撃法を切り替え、塹壕を掘りつつ攻撃します。9月19日から逐次敵前進陣地を奪取し、10月26日から第2回目の総攻撃を開始します。しかし一部堡壘の奪取に留まり敵を降伏させることは出来ませんでした。

この攻撃には内地の砲台から外して急送した28センチ砲18門が約2千発の砲弾を叩き込んだ他、7月中旬には第9師団が内地から増援されました。しかし31日にはまた砲弾が不足し、またしても攻撃中止をせざるを得ませんでした。この攻撃での日本軍の死傷者は約3千8百人にのぼります。

そして11月26日に第3回目の総攻撃を開始します。今度は地下道を掘って地下から堡壘を爆破する戦法を試みます。また夜間に友軍の位置がわかるよう白礮（たすき）をかけた3千人が夜襲をかけます。しかし攻撃が進展しなかったことから、翌27日には正面からの攻撃を中止し、要塞の左翼である203高地の攻略に転じます。これを攻略すると港内を見下ろすことができ、

き、港内の旅順艦隊を砲撃できます。

ロシア軍もこれを察知し攻防が繰り返されましたが、12月5日にやっと203高地を奪取します。以降8日までの間、旅順港内を砲撃し旅順艦隊を全滅させます。しかしこの203高地の戦いで11月30日には乃木大将の次男である保典（23歳）も戦死します。

さらに1カ月近くかけ第3軍は主要な堡壘を奪取します。年が改まった1月1日になり、要塞司令官のステッセル中将は降伏を申し出ます。

4 水師営の会見

明治38年（1905年）1月1日午後5時、ロシア軍の軍使がやって来て乃木大将宛の手紙を差し出しました。それには「このようになれば、もう旅順要塞の抵抗は不要であるので、開城に関する会合を持ちたい」と書かれていました。

その夜、乃木大将は大本営に「敵は降伏の意思がある」と報告します。また山縣参謀総長はその旨を天皇陛下にお伝えします。天皇陛下からは「ステッセル將軍は祖国のため戦ったのであるから、武士の名譽を保てるようにせよ」とのお言葉が伝えられます。乃木大将は直ぐに特使を送り、このことをステッセルに伝えます。2日に両軍から指名された委員による会合で、5日に水師営において停戦

協定を乃木大将とステッセル將軍との間で締結することが合意されます。

その際、ロシア軍に生鮮食品が不足していることが判明します。それは籠城戦ですから当たり前です。しかし乃木大将は次の日（3日）に2両の輜重車に満載した野菜や鶏とブドウ酒を送り届けます。

いよいよロシア軍の最高司令官と停戦協定を結ぶ5日がやってきます。津野田参謀に導かれ、滴るばかりの水色外套を着たロシアの将校4騎が水師営にやって来ます。2番目の白蘆毛のアラビア馬に乗ったのがステッセル將軍、次ぎが旅順口要塞参謀長レイス將軍です。その前後を2將軍の副官が両將軍を扶むようにしています。さらにその後ろを7騎のコサック兵がついてきました。やがて庭に棗の木が生えている民家の門前に至り馬から下り、会見所に入ります。日本側からは乃木大将、伊地知参謀長、安原参謀及び松平副官が会見所に入ります。戦いで荒れ果てた家屋の壁には砲弾痕が残っています。

まずステッセル將軍は「先日はわざわざ人を遣わして私の身上に慰問を賜わるだけでなく、心づくしの品を賜り感謝申し上げます。また貴国の皇帝陛下よりのお言葉を伺って此の上もなく感激しました」と述べます。（この点は歌と異なり）さらに口歳を頭に

6歳までの孤兒、女4人と男2人を妻と共に面倒を見ていることを話しながら「親の気持ちになると」と言いながら「將軍の二子息の2人は共に戦死されたとか、將軍の御心は察するに余りあります」と目にうつすらと涙を浮かべます。すると乃木大将は「將軍の慈悲深い心が偲ばれます」と述べ、「私の2人の子供は代々武士の家柄です。武士の家に生まれた者が国のために命を捨てるのは当然のことです」と答えます。それに対してステッセル將軍は「なるほど、貴國の將士が勇敢なのは実にそういうところがあるからなのですね」と言います。これに乃木大将は

「いいえ、勇敢なのは貴方の國の將士です。ところでこの戦いで將軍が最も驚かれたことは何ですか」と質問します。それに対してステッセル將軍は直ちに「それは28センチ砲を初めて撃たれた時のことです」と応えます。それに対して乃木大将は「貴國の將士があまりに勇敢であったため、遂に内地の砲台から外して持ってきたのです。しかしあの砲であっても貴國のベトンで打ち破ることはできなかったのでは」と質問します。ステッセル將軍は「いやいや、あの砲は実に怪物のようなものでした」と応えます。

これまでが、『水師營の会見』の1番から6番の話です。この会見でステッセル將軍は乃木大

將の謙虚な慈愛溢れる人柄を知り感動します。ステッセル將軍としても日本軍に相当の被害を与えたことや大将の息子2人がこの戦いで亡くなっていることを知っているのです。この会談でどんな嫌味や強い口調で詰問されるかと思つていたはずですが、それが「昨日の敵は 今日の方 語ることもばも うちとけて 我はたたえつ かの防備 かれは称えつ わが武勇」となつたのです。

やがて昼となりましたので、会談に参加した全員で昼食会を催します。

会談を通じ、乃木大将の仁愛の心に感動したステッセル將軍も打ち解けます。そして次のように言います。「私は2頭の純アラビア種の馬を持っています。本日乗ってきたのもその1頭です。私はこれから故國に帰りますが、馬を必要としません。もし許されるならば、私の馬を引き取って頂ければ、望外の幸です」と。これに対して乃木大将が「ご厚情は感謝します。しかし馬は閣下の私物であり、しかも武器の一種です。これを受け取るには軍規に基づき正式な手続きをとらなければなりません。もし軍が認めたならば私は一生頂いた馬を可愛がります」と伝えます。

戦いに勝つた者が敗者から1頭の馬をもらうだけです。それを「軍規に基づき手続きを踏んで頂戴します」と述べ

べられるのです。なんと自己を律するに厳格なのでしょう。その後、外庭に出て全員の写真を撮影します。

やがて午後1時となり、ステッセル將軍以下全員が乃木大将以下と握手をし、去つて行くのです。

以上が『水師營の会見』の7番から9番です。

5 乃木大将の武士道

この5日の会見を事前に伝え聞いたアメリカ人の映画技師や各國の特派員が、自國にこの状況を配信するため、その様子の撮影を要望します。しかし乃木大将はその要望を断ります。それは「敵將にとって、後々まで恥が残るような写真を撮らせることは、日本の武士道が許さない」というものでした。しかし要望が引き続き寄せられたために「会見後の両司令官が既に友人となつて同列に並んだ所ならば、一枚だけ許そう」と答えます。それがこの写真です。

通常、降伏した者には武装や勲章等を着けることを許しません。しかし明治天皇からの「武士の名譽を保たしむべき」との大詔もあり、乃木大将はステッセル將軍以下全員に勲章をつけ帯剣をして会見に臨むことを許したので、両軍の將軍達はどちらが勝者で、どち

らが敗者かわからないようなお互いが友人同士のような写真となつていきます。このように、この会談は勝者の奢りも敗者の卑屈もなく、共に祖國のために堂々と戦つた將兵の誇りと満足と相手に対する畏敬の念に満ちたものとなつたのです。

これは乃木大将が、同じ軍人として敗者となつたステッセル將軍の辛い心の内を痛いほどわかっているからできたことなのです。このような仁愛の心遣いを「武士の情け」と言います。

この会見の様子は、この写真とともに全世界に報道されました。武士道精神に基づく乃木大将のステッセル將軍への仁愛と礼節にあふれた態度は、世



(中央列の向かって左から2人目が乃木大将、その右がステッセル將軍)

界を感銘させます。世界は4年もかけ準備した要塞がわずか半年で陥落したことに驚き、またこの会見に感動したのです。乃木大将のステッセルに対する「武士の情け」は、この後も続きます。

日露戦争後、ステッセル將軍は旅順開城の責任を追及され、軍法会議で死刑の判決を受けます。それを知った乃木は、当時パリにいた元第3軍參謀・津野田是重少佐に対して、ステッセル將軍を弁護するように依頼します。少佐は仏、英及び独の新聞に投書して「開城はやむを得ざるものであり、ステッセル將軍は立派に戦い抜いた」ことを詳しく述べました。これが奏功して、ステッセル將軍は死刑の判決を特赦により禁錮10年に減刑されます。そして釈放後はモスクワ近郊の農村で静かに余生を送りました。ステッセル將軍は晩年、「自分は乃木大将のような名將と戦って敗れたのだから悔いはない」と語っていたそうです。

6 終わりに
乃木希典は長州（現在の山口県）の武士の生まれでした。しかし子供の頃から体が弱く、泣き虫でした。幼名は無人（なみど）です。家族や同輩から「泣き人」とからかわれるくらいでした。このようなことから16歳の時に将来は武士ではなく、学者になろう

と考えます。そこで親戚であった玉木文之進（吉田松陰を幼少時に教育）に相談しに行きます。すると文之進は「武士の家に生まれた者が武芸を好まず、学問だけをしようという気持ちなら、早々と帰れ」と怒ります。その際、文之進の夫人辰子が「こんな夜中に、あの山道を越えるのは大変です。とにかく今夜は泊まっていきなさい」と、いたわります。そこで甘えて泊ります。

その夜、夫人は乃木に向って「学問を志すと聞きましたが、試みにこの本を読んでごらんさい」と『論語』を差し出します。しかし乃木は『論語』をよく読めませんでした。そこで乃木は学問も十分でないと考え、玉木文之進の家に住み込んで農業をしながら学問をします。こうして玉木文之進夫妻から教育を受けている間に、武士としての修業を積もうと志すようになったという逸話が残っています。

私どもは、乃木大将がどのようにして、このような仁愛溢れる心を持たれるようになったかを知る由もありません。しかし、乃木大将も学んだ論語に次のようなことが書かれています。

弟子の顔淵が仁を行う方法を孔子に質問します。孔子が答えて「自分自身に打ち克つて、礼に立ち戻ることで、仁を行うのは自分自身であり他人の助けによるべきではありません」とおっしゃいました。そこで顔淵が「仁を實

踐する方法を教えてください」と質問します。これに対して孔子は「礼に外れたことは見えないように、礼に外れたことは聴かないように、礼に外れたことは言わないように、礼に外れたことは行わないようにすることです」とおっしゃいました。顔淵は「今教えていただいたお言葉を一生かけて実行したいと思います」と述べます。（顔淵第十二・1の意訳）

ここにあるように、自分が仁者になろうとするならば、「己に克ちて礼に復る（克己復礼）」ということが必要です。「礼」とは自分の真心を形として表すことです。

例えば、学校の同級生の中に性格が暗く、皆と一緒に遊ばない、しかも喧嘩も弱そうな人を皆でいじめていませんか？「弱虫」とか、「根暗」とか言っていないですか？変えることが出来ない顔立ちや体型などをあざ笑っていませんか？

そのようなことを言っていじめるのは、彼よりも自分達が優れているという自惚れであり、優越感が満足させられるだけでなく、手向わずに惨めそうにしている彼の姿が面白く、しかも彼のことを考えないから安易で気楽にできる行為なのです。

そのような己に打ち克たなければ仁愛の真心を発揮することは出来ないのです。皆にいじめられる人でも、その

人は同じ人間です。きつと何か理由があるのです。その理由を相手の立場に立つて考え、彼のことを思い遣る真心で振る舞うのです。気楽な安易な振る舞いをしないようにするので。そうすることが仁愛ある行動なのです。

世の中には不誠実なことが一杯あります。これらと一切かわらないということはできないでしょうが、努めて「礼に外れたことは見えないように、礼に外れたことは聴かないように、礼に外れたことは言わないように、礼に外れたことは行わないように」ことにより「仁愛ある心」が育つのです。

『水師宮の会見』 佐佐木信綱 作詞
出所「防人の歌 雄叫」

1、旅順開城約成りて 敵の將軍ステッセル 乃木大将と会見の 所はいずこ水師宮

※「開城」とは降伏して要塞を敵に明け渡すこと

2、庭に一本棗の木 弾丸あともいぢぢく ぐずれ残れる民屋に 今ぞ相見る二將軍

※「棗の木」は寒さに強い広葉樹。果実は菓材料あるいは生薬として用いられる
※「いぢぢる」は「著しく」の文體

3、乃木大将はおごそかに御めぐみ深き大君の

大みことのり伝うれば
彼かしこみて謝しまつる

※「御めぐみ」は「御恵み」と書き、ここでは天皇陛下の「慈愛」のこと

※「大君」とは天皇陛下のことであり、ここでは明治天皇をさす

※「大みことのり」は「大詔」のことであり、天皇陛下の御言葉のこと

※「かしこみて」は「畏みて」と書き、「畏れ多く思う」こと

4、昨日の敵は今日の友

語ることはもうちとけて

我はたたえつかの防備

かれは称えつわが武勇

5、かたち正して言い出でぬ

『此の方面の戦鬪に

二子を失い給いつる

閣下の心如何にぞ」と

※「かたち正して」とは座っている姿勢をきちんとした姿勢にしあらたまること

※「二子を失い」とは、共に陸軍軍人でありこの戦いに参戦していた長男勝典中尉は南山

の戦いで斃れ、次子保典少尉は203高地で戦死したこと

6、『二人の我が子それぞれに

死所を得たるを喜べり

これぞ武門の面目」と

大将答力あり

※「武門の面目」とは武士の家筋としての世間に対する体面

7、両将昼食共にして

なおもつきせぬ物語

『我に愛する良馬あり

今日の記念に献ずべし』

※「献ず」とは差し上げること

8、『厚意謝するに余りあり

軍のおきてにしたがいて

他日我が手に受領せば

ながくいたわり養わん』

※「軍のおきて」とは軍規のこと

9、『さらば』と握手ねんごろに

別れて行くや右左

砲音絶えし砲台に

ひらめき立てり日の御旗

※「ねんごろ」とは懇切丁寧のこと

【参考文献】

・S・ウォシユバン『乃木大将と日本人』

・桑原 嶽『名将 乃木希典』

・伊勢雅臣『世界が賞賛する国際派日本人』

・福田和也『乃木希典』

・吉丸一昌『歌詞評釈』第五学年用

・桑田悦・前原透『日本の戦争』

・簡野道明『論語解義』